

アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの増改築作品の空間構成  
アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの建築作品に関する研究(3)

正会員 ○ 佐原 謙介\*  
同 安森 亮雄\*\*  
同 福田 充弘\*

スミッソン 増改築作品 空間構成 周辺要素

1. 序 イギリス人建築家アリソン・スミッソン(1928-1993年)とピーター・スミッソン(1923-2003年)は、CIAM(近代建築国際会議)の解散を促す形で1956年にチーム10を設立し、都市空間の変化や建築の周辺環境に関心を向けた。筆者らは、既報<sup>1)</sup>において彼らの作品の特徴である棟(パヴィリオン)と通路(ルート)の構成による外部環境について報告した。本研究では、彼らの作品に増改築が多く、既存建物や周辺環境との関係とともに、建築の時間的な変化についての彼らの思想が顕著に表れていると考えられることから、増改築された要素と既存建物や周辺要素との関係を検討することで、スミッソンの増改築作品の空間構成を明らかにすることを目的とする。

2. 増改築部・既存部・周辺要素の種類

2.1. 増改築作品の概要 スミッソンの全99作品(うち実作19作品)のうち約1/4の25作品(表1)は増改築であり、数少ない実作では約6割(13/19)を占めていることから、彼らの思想を実現する上で増改築作品は重要な位置づけであったと考えられる。また、こうした作品には、複数時期にわたって増改築を繰り返すものがみられる。例えば分析例(図1)のHexenhausは1986年から2001年の15年間に計9回の増改築が行われた。こうした複数時期にわたる作品(複数期)が4作品、増改築を一回のみ行う作品(単期)が21作品ある。本章では、単期の作品とともに複数期の作品を時期ごとに検討する<sup>2)</sup>。

2.2. 既存部と増改築部の種類と配列 スミッソンの増改築作品は、増改築された要素がヴォリュームとして明確に分節されている。例えば分析例の第3期の増築(図

1, No. 23-3)は、既存部である住宅に対して別棟がブリッジで連結されている。ここで別棟は室を担うヴォリュームとしての「棟」、ブリッジは動線を担う「通路」と位置づけることができる<sup>3)</sup>。そこでまず、増改築された要素を、増築部について棟と通路、それらが内部か外部かという違いにより整理し、あわせて既存建物の内部の改築についても検討した(表2)。その結果、増築された棟は小規模な一室と大規模な複数室・階がほぼ同数であり、通路は線状の外部通路が多くみられた。また、既存部が建物か塀などの建物以外の要素か整理した(表3)。さらに、増築部の配列については、既存部を内部に包含するものと、既存部と増築部で囲まれた空間を形成するものもみられた(表4)。

2.3. 周辺要素 スミッソンの増改築作品では、既存建物と周辺にある要素との特徴的な関係がみられる。例えば分析例の第3期の増築(図1, No. 23-3)では、天井・床・壁の約半分をガラスにすることで、室内から周辺の木々を眺めることができる。こうした周辺要素は半数以上の作品にみられ(25/40)、木や川などの自然の要素が多く該当した(表5)。

3. 増改築作品の構成類型 前章で検討した増改築部と既存部および周辺要素の組合せを検討した結果、同じ傾向をもつ7つの類型が得られた(表6)。類型①~③は既存部に対して棟や通路の増築または改築のどれか1つを行ったものである(単一操作)。このうち①-1は棟のみが増築された構成である。①-2は周辺の木々や川に向けて小さな室を増築するなど、周辺要素との特徴的な関係をつくるものであり、①-3は既存部が塀などの建物以外のものである。

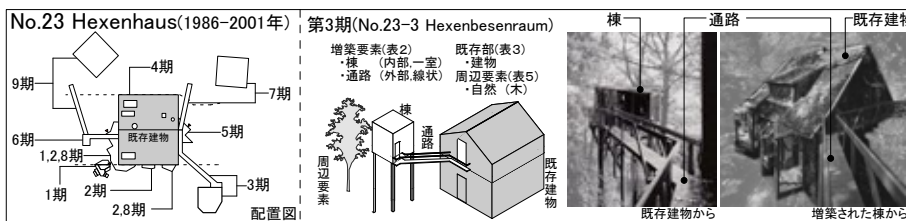


図1 分析例

表2 増改築された要素

増築部	棟		通路		改築部
	一室	複数室・階	面状	線状	
内部	(16)	(14)	(3)	(5)	(7)
外部	(2)		ブリッジ・塀・舗装路 (7)	ブリッジ・塀・舗装路 (15)	

表1 資料リスト

No	設計年[竣工年]	作品名	No	設計年[竣工年]	作品名
1	1950	Coventry Cathedral	17-3	1981 [1981]	Animal House (University of Bath)
2	1951 [1964]	The Economist Building	17-4	1982 [1988]	Building 6 East (University of Bath)
3	1953	House Extension	18-1	1980 [1990]	Arts Barn 1 (University of Bath)
4	1953	Sheffield University	18-2	1980	Arts Barn 2 (University of Bath)
5	1953	Chance Glass Flat and Mammoth Terrace House Conversion	18-3	1980	Arts Barn 3 (University of Bath)
6	1954 [1991]	Caro House	19	1980	Litizowstrasse Apartments for the Elderly
7	1959 [1959]	Wayland Young Pavilion	20	1980	Litizowstrasse Child-Care Centre
8	1959 [1962]	Solar Pavilion	21	1980	Litizowstrasse Youth Centre
9	1959	Losey House	22	1982	National Gallery
10	1961 [1971]	Priory Walk	23-1	1986 [1986]	Axel's Porch (Hexenhaus)
11	1965	Crispin Hall	23-2	1990 [1990]	Riverbank Window (Hexenhaus)
12-1	1971 [1971]	Garage and Studio (Ansty Plum)	23-3	1990 [1996]	Hexenbesenraum (Hexenhaus)
12-2	1986 [1986]	Ramp (Ansty Plum)	23-4	1990 [1997]	Hexenhaus Holes (Hexenhaus)
12-3	1992 [1992]	Porch (Ansty Plum)	23-5	1997 [1997]	Front door porch (Hexenhaus)
13	1971 [2003]	Gilston Road	23-6	1997 [1997]	Bedroom pier (Hexenhaus)
14	1974	Magdalen College	23-7	1997 [1997]	Tea Pavilion (Hexenhaus)
15	1977	New West End to Worcester Cathedral	23-8	2000 [2000]	Axel's Porch 2 (Hexenhaus)
16	1977	Walk in the Dry Passages	23-9	2001 [2001]	Lantern Pavilion (Hexenhaus)
17-1	1978 [1980]	Amenity Building (University of Bath)	24	1990 [1990]	Tecta Canteen Porch
17-2	1979 [1981]	Second Arts Building (University of Bath)	25	1990 [1995]	Brodia Road

(全25作品)

表注) [竣工年]の記載のない作品はプロジェクト作品である。

表3 既存部の種類

建物(38)	建物以外(6)

表4 増築部の配列

包含(5)	囲み(3)

表5 周辺要素

自然(20)	人工(7)

Spatial Composition of Renovation Works by Alison and Peter Smithson  
A Study on Alison and Peter Smithson Works (3)

Kensuke SAHARA  
Akio YASUMORI  
Mitsuhiro FUKUDA

②-1は既存建物と周辺の木々の間に回廊を増築することで周辺要素との関係をつくるものであり、②-2は既存の建物同士を通路でつなぐ構成である。③は既存建物内部の改築のみを行ったものである。次に、類型④～⑦は複数の増改築が行われたものである(複合操作)。④は既存建物と増築された建物を通路でつなぐ構成である。⑤は複数の既存建物と増築された建物で面状の通路を囲むものである。⑥は既存建物と増築された建物を線状の通路でつなぐ構成である。⑦は外部通路の増築と既存建物内部の改築である。

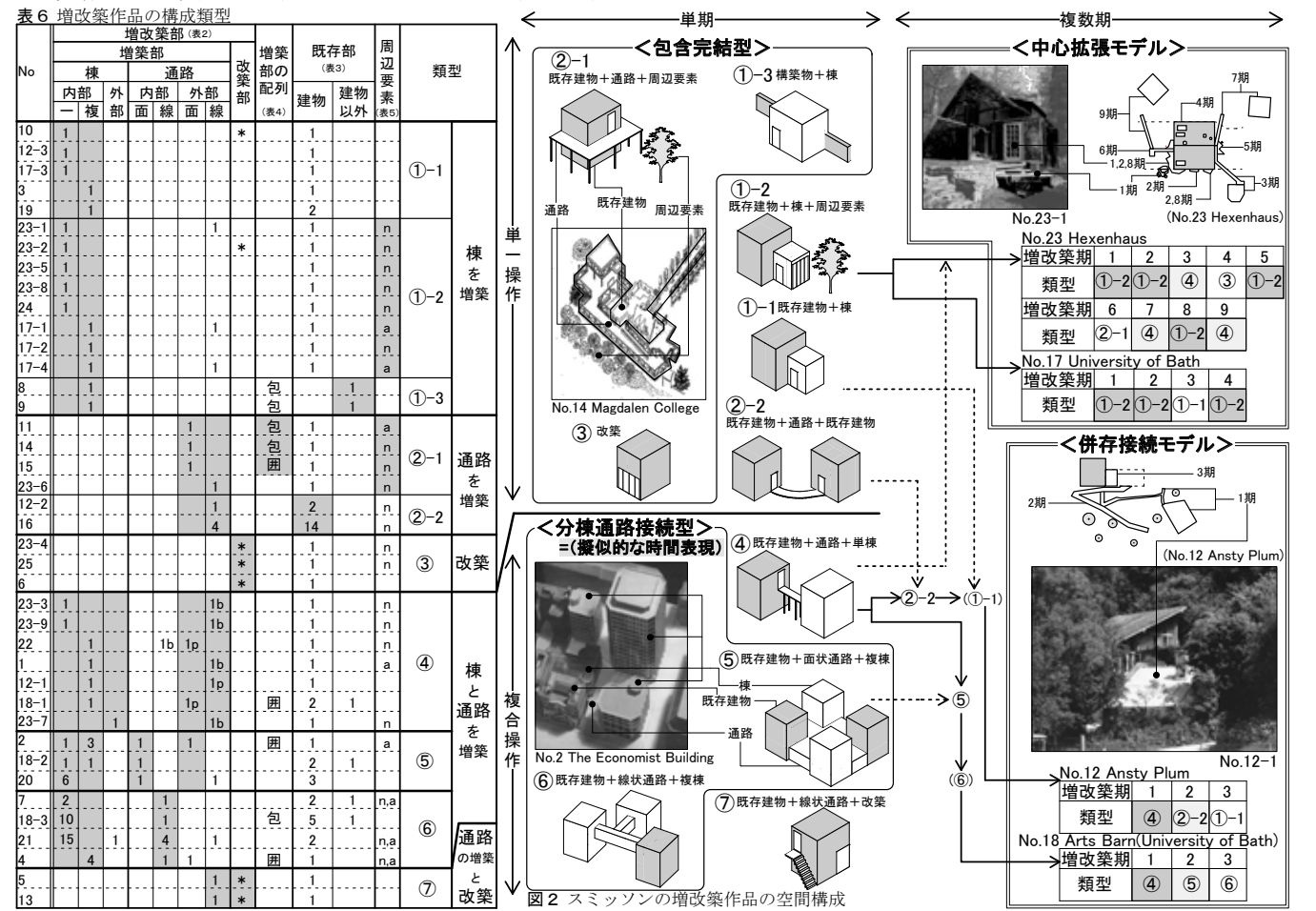
これらの種類のうち、主に単期の増改築にみられる特徴をまとめると(図2)、①-3は塀などの既存部が増築部に含まれたもの、②-1は外部通路が既存部を包むもの、③は既存建物の内部の改築のみであり、これらは既存部と増改築部が包含関係をなす「包含完結型」といえる構成である。また、⑤と⑥は複数の分棟を増築し、それらを自ら増築した通路でつなぐ構成であり、「分棟通路接続型」といえる。

**4. 複数期に増改築された作品** 本章では複数期の増改築作品を検討する(図2)。増改築された時期ごとの種類の組合せを検討した結果、2つの傾向が得られた。Hexenhaus(No. 23-1~9)は周辺の木々を眺めるポーチの増築(①-2)が多く、離れの棟を通路でつなぐ増築(④)も併せ持つ。同様にUniversity of Bath(No. 17-1~4)も周辺の歩道にアプローチする増築(①-2)が多い。これらは中心の既存建物を、周辺要素に向けて徐々に拡張するように

増改築するものであり「中心拡張モデル」といえる。一方、Ansty Plum(No. 12-1~3)やArts Barn(No. 18-1~3)は、増改築の1期目の棟を既存建物から離して配置し(④)、後に既存建物と1期目の棟の間に、通路や棟を増築していく特徴がみられる(②-2、⑤)。これらは増築した別棟を既存建物と併存させ、徐々にその間をつなぐものであり「併存接続モデル」といえる。

**5. 結** アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの増改築作品の空間構成を、増改築部・既存部・周辺要素から検討した。その結果、単期では包含完結型と分棟通路接続型、複数期では中心拡張モデルと併存接続モデルが得られた。このうち分棟通路接続型は分棟とそれらを接続する通路が分節されることで、単期でありながら複数期の併存接続モデルと類似した構成をしており、あたかも時間をかけて増改築したように擬似的に時間を表現するモデルといえる。これらのことから、スミッソンの増改築作品は計画順序や空間構成の操作により、時間の表現を主題としていることを明らかにした。

注1) 安森亮雄, 福田充弘: アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの「バヴィリオンとルート」作品における外部環境のデザイン(1)(2), 日本建築学会大会学術講演梗概集F-2, pp. 863-866, 2010. 本研究はこれら2編に続くスミッソンの建築作品についての3編目の研究としてタイトルに通し番号をつけている。  
2) 全作品集「The Charged Void, Architecture(建築編)」、2001, Urbanism(都市編) (2003, Monacelli), 及び「from the House of the Future to house of today」(2004, 010 Uitgeverij)の図面や写真を資料とした。  
3) スミッソンは棟(バヴィリオン)と通路(ルート)という概念を提示し、全作品集においても5つの章を割いており、設計の重要な方法となっている。



\* 宇都宮大学大学院工学研究科 大学院生  
\*\* 宇都宮大学大学院工学研究科 准教授 博士(工学)

\* Graduate Student, Graduate School of Eng, Utsunomiya University  
\*\* Assoc. Prof., Dr.Eng., Graduate School of Eng, Utsunomiya University